

Matthew Arnold における「教養」の理念

—その社会批判と教育論の基底として—

竹 熊 耕 一

Matthew Arnold's Idea of 'Culture'

—as the Base of his Social Criticism and Educational Thought—

Koichi Takekuma

I

詩人、評論家として著名な Matthew Arnold (1822~1888) は、その生涯の過半を勅任視学官の職にあって、19世紀後半のイギリス教育の進展に貢献した人物でもある。周知のごとく当時の教育界の争点として論議の集中していた問題は、国家の教育関与のあり方をめぐってのものであったが、Arnold は公権力の積極的な介入を促す立場からその活動を展開した。彼は、行政官の地位から幾多の報告書を通じて自らの意見を政府当局に具申すると同時に、その文筆家としての影響力を生かし、数多くの教育評論あるいは社会批評を発表して世論の喚起に努めたのである。彼のそうした発言は、この時代漸く教育の領域にも兆しを見せていた自由放任主義から集産主義への移行を推し進める上で、重要な思想的モメントの一つとなったと言われている¹⁾。

さて Arnold のこうした活動全般について先ずわれわれの注目を惹くのは、彼の主張の重点となったのが、一般にこの時点で論争の焦点となっていた初等教育に関するものではなく、中等教育の問題であった点であろう。Arnold は、当時全く国家干渉の枠外にあって、すべて私的営為に委ねられていた中等教育を、速やかに国家的に組織化することを提唱した。彼のこの発言は、初等レベルの国民教育がやっと法制化されつつあった60年代の段階では、確かに他に先んじるものであった。のみならず Arnold は、視学官として赴いたヨーロッパ各国の教育事情の視察・調査を通じて豊かな比較教育的知見を持ち、これに基いて中等教育の国家管掌策を具体化して提出する²⁾ など、熱意をこめてこのテーマに取り組んだのである。彼は、イギリス教育史上、次代の中等教育の「予言者」であったとの評価を屢々受けているが³⁾、この評価は、彼のこうした先見性と実行性とに由来すると言えよう。

ところで、このように改革の主導者たらんとした Arnold にあって、そもそも中等教育というものの果たすべき本来的役割は、どのように把握されていたのであろうか。この点について彼は、確信に満ちた言明を残している。「中等教育は、その本質において一般的かつ非職業的な教養 (general and liberal culture) を目的とする。……中等学校を職業に直結した学校にすることは誤りである」⁴⁾ と。この時代、産業社会の到来によって自然科学や技術的知識の重要性は著しく増大しつつあった。しかし、そうした教科を中心として特定の生活環境で要求される専門的な能力・資質の開発を図るのではなく、すべての被教育者に等しい教養を授けることをもって中等教育の本旨とする立場を、Arnold は堅持していたのである。

こうした見地に立つ彼にとって、当時の中等教育状況は極めて不満足なものであった。この時点において中等段階の教育は、明らかに対象が上流および中間階級の児童に限定されており、しかも彼らの教育の場と形式は、階級内各層の教育関心と直接的利害に応じて多様に分裂していた⁵⁾。そしてそれらはみな質量ともに不安定であったのである。その中では一握りの数のパブリック・スクールのみは、上流そして一部の中間階級の子弟を集め、支配階級練成の場として確固たる地歩を占めつつあった。けれども、パブリック・スクール教育は性格陶冶に主眼を置いて学識を軽んずる結果、教養に対する「無関心」とその「必要性への不信」に彩られているとして、Arnold はこれにも否定的な態度を示していた⁶⁾。

このようにして既存の中等教育をすべて「散漫な私的事業」⁷⁾として斥ける Arnold は、これに代わるべき、真に教養を啓蒙する優良な教育を、国家的経営と統制の下に確立しようと企図した。彼の構想する公的に制度化された中等学校組織は、低廉な費用により大多数の中間階級⁸⁾の児童を収容して学習の機会を与え、しかも国家の査察を経て、均一の教育内容と一定の教育水準を維持すべきものであった。Arnold は、他のいかなる利点にもまして、「良質で健全で、そして現在最高の」⁹⁾教養を広汎に提供するところに、中等教育の国家的制度化の意義を認めたのである。

本稿は、Arnold をして次代の中等教育の「予言者」たらしめた、その思想的要因を捉えることを意図するものであるが、その際上述のごとく、彼の中等教育への接近が、「教養」の問題を核心としてなされた点に着目するならば、彼の抱懐していた「教養」理念の分析こそが、この論考の中心課題とならざるを得ない。

ここで、Arnold の「教養」に関する論議を検討するに当たって第一に留意すべきは、それが決して単なる教育論として語られたものではなかったという事実であろう。彼の教養観が最も精細に述べられた著作が、特に「政治・社会評論」と副題された『教養と無秩序』(Culture and Anarchy, 1869)に他ならぬことが端的に物語っているように、彼における「教養」は、教育の一般的目標であるのみならず、彼の社会批評が拠って立つ基準であり、これを構成する中核的概念でもあった。換言すれば、「教養」は、彼の社会観と教育思想を共にその根底で支え、両者を分かち難く結びつけている根本概念なのである。それ故に、自らの時代と社会への批判的認識を「教養」の問題に収斂させ、やがてはそれを中等教育改革プランに結実させていった Arnold の思索過程を顧みるならば、彼の教養論の内容的解明は、何よりもその社会批判の文脈に即してなされる必要があるであろう。Arnold の「教養」理念は、その内容規定において、すでに彼の社会批判の諸相を強く反映しているものであり、われわれは、あくまで彼の社会認識と一体のものとしてこれを取り扱わねばならない。このことはつまり、Arnold の教養論を、それを必然的に生起せしめた歴史的社会的諸条件との関連において把握することを意味する。「同時代の文明の、最も広いコンテクストにおいて教育を見つめた」¹⁰⁾と評される Arnold の、ヒューマニストとしての思想と行動が有する教育史上の意義も、こうした手続きを経てはじめて明らかにされ得るであろう。

われわれは以上のような問題視角から Arnold の教養論を取り上げるのであるが、そこで前提となるのは、批評家としての彼の活動と、教育の分野におけるそれとの密接な連関である。けれどもこの点については、既に Walcott による綿密な研究が指摘しているところである。ただ Walcott にあっては、Arnold が直面していた社会的問題状況の把握が弱いためか、彼の「教養」の理念にこめられた社会批判的観点についての分析は、やや閑却されていると思われる。そのため Arnold の教育的企図が、専ら国民の「教養における融合」(cultural fusion)¹¹⁾といった一般

的命題に還元されたきらいがある。また、Arnold に関する最も詳細な教育史的研究を残した Connell の場合も、前者と同様の方法的難点の故に、Arnold の説く「教養」の諸側面を、単に記されてある定義から抽象的に論ずるのみで、そのアクチュアルな意味に触れ得ないままにおわっている¹²⁾。

本稿では、自らの生きた社会現実との、のっぴきならぬ対決の下に生み出された包括的な文明批判・時代批判としての Arnold の教養論を、その全体的視野に注目しつつ考究してみたい。

II

Arnold の主要な教養論とされる『教養と無秩序』は、必ずしも十分な意味で体系的ではないが、そこには本考察の主材料となるべき豊富な内容が含まれている。その序文に見られる有名な「教養」の定義をまず検討してみたい。

「教養とは、われわれに最も関わりのあるすべての問題について、これまでに世界で考えられ語られた最良のものを知り、さらにこの知識を通じて、われわれの持ちあわせの観念と習慣 (stock notions and habits) に、新鮮で自由な思考の流れを注ぎかけることによって、われわれの全体的な完成 (total perfection) を追求することである。」¹³⁾ この定義を内容的に整理してみよう。すなわち「教養」は明らかに知識を要件とするが、決して単なる出来合いの知識の蓄積を指すのではない。むしろそれは、人間の「全体的な完成」を究極目標とする知性の活動そのものである。この知性の能動的活動は、人間の日常的に習慣化され固定化された思考と行動に対して、絶えず「新鮮で自由な思考の流れ」を注入する批評的機能を有するのであるが、この批評的活動の源泉となるべきものが「これまでに考えられ語られた最良の」知識である。Arnold における「教養」の基本性格を、われわれはまずこのように掴んでおきたい。

さて Arnold は、「教養」を「われわれの現在のもろもろの困難を大いに救うもの」として推奨する。「教養」ということばにつきまとう「書物臭く、学究的で、現実は何らの実りももたらさないもの」¹⁴⁾ という通常の固定観念を払拭し、能動的な意味における「教養」の現実的実践的意義を説き明かすことが、『教養と無秩序』の主題であった。Arnold がそこで強調したのは、「教養」の保有する批評的機能であり、これこそが、イギリス社会の直面する「もろもろの困難」を除去する実際の役割を担いうるものとされたのである。

それでは人間の批判的知性ないし批評精神は、いかなる形において実践的性格を持つのであろうか。『現下における批評の任務』(The Function of Criticism at the Present Time) と題する論文¹⁵⁾において、Arnold は以下のごとく述べている。「批判・批評する力 (critical power) は、……創造力 (creative power) が有効に用いられ得る知的な状況を作り出すことに資する」¹⁶⁾。批評は、人間の完成へ繋がる最良の思考と行動を追い求めて止まない。批評はその追求の過程において、あくまで「完成」(perfection) の理想に依拠し、またそれにのみ拘束されながら、人間の完成に利することのない、あるいは逆にそれを妨げる諸傾向に対しては、容赦なくこれを剔出する。この働きにおいて批評は、人間の善への意志と努力が、徒勞に帰すことなく着実に歩を進めるための不可欠の前提となる。Arnold の主張する批評の実践性とは、このように、人間の道徳的活動ないし倫理的創造の基礎的要件としての意味なのである。

こうした点で批評は、固より往々非難されるような、単なるあらさがし、無為な知識人の手すきびなどではなく、むしろ万人が、己れの思索と行為に対して必然的に遂行すべき真摯な人間の営みである。ただし Arnold に従えば、批評がその任務を全うするためには、批評の主体が「純

然たる知性の領域」に留まって判断を下すことが肝要である。これは、批評者が、その対象との利害関係を自らの批評行為に一切投影してはならないという原則の呈示である。つまり批評者はその客体を「それがあるままに見る」明晰さと、「自らの得失に囚われない」(disinterested)公正さを備えた冷徹な客観的視点を絶えず維持する必要がある。したがって、いかなる意味においても自らの利害得失に関わる実践活動ないし運動からは、常に精神的に離脱し、これを対象化する構えを保持するところに、己れに対する批判的態度が成立する。Arnold はこの「離脱」の重要性を特に強調し、批評機能たる「教養」を、狭義の実際の「行動」から弁別する。彼は、ある論稿において、人間生活の四分の三は行動が占め、教養が占める部分は残り四分の一であると述べているように¹⁷⁾、人生の意義を最終的に決定するものが前者であることには、些かの疑念も抱いてはいない。しかしながら、一個の人間において行動的側面のみが無制限に肥大化し、「教養」がそれによって圧迫を受け、その反省的機能が停止させられることを恐れた。行動に精励するあまり、それに自己を埋没させることは、ある意味で人間にとって容易であろう。これに反して、自らの行動を客観視し、敢えて批判の対象とする自覚的な営みには、鞏固な自律の精神が要求される。けれども、自己の行為の道徳的吟味を保証するものが、畢竟そうした柔軟で強靱な知性の働きであるとすれば、万人はその義務として、まずは「最良の知識」を体得し、自己省察の眼を養い、批判力を研ぎ澄ませなければならない。かくして獲得された最良の知識を通して、透徹した批評的精神が涵養されたとき、それが Arnold の言う「教養」となるのである。

さて、こうした「教養」によってこそ、現実の「もろもろの困難」は克服され得ると考えた Arnold の眼には、当代のイギリス社会が、批判的精神を欠いた迷妄と錯誤の行動が充満している場として映じたのであった。彼が、世人に対して実践行動からの精神的離脱を説き、そのための「教養」の重要性を訴えたのも、実はそのような鋭い現実認識・時代診断に基くものであった。この時代の病弊を癒す上で真に有効なものは、性急な行動よりも、むしろ正しい行動の基礎となるべき知的教養である、と彼は主張するのである。それ故に、現状にあって最も積極的な意味を担うものは、自らの得た「最良の」知識を「世に知らしめ」、社会全体の共有物たらしめんと努める「教養の共鳴者」の批評的活動の外にはない。Arnold の教育行政官としての活動も、評論家としての活動も、共に彼が、「教養」の普及を図る「教養の使徒」たる自らの使命を果たさんとするものであったと解せよう。

『教養と無秩序』は、こうした使命感に支えられた活動の一環として、正面から教養の問題を論じた著作であるが、Arnold はその大半のスペースを割いて、イギリス社会を覆ういくつかの因習的「観念と習慣」を祖上に載せ、鋭い批判の刃を加えている。このことは、この書物が、教養の一般的内容を語りつつも抽象論には終わらず、むしろ社会批評の性格を濃厚に備えることによって、批判機能としての「教養」の現実的有用性を自ずと立証するという、二重の意図を持って書かれたことを示すものである。その結果、Arnold は批判力の必要性を説くと同時に、その批判が向けられるべき対象を、明確に指示したのである。それでは、批判の対象となる諸々の「観念と習慣」とは何であったのか、Arnold の問題設定に即して言い換えるならば、「教養」はいかなる「無秩序」との対決を迫られていたのであろうか。

III

一般的な歴史理解として、Arnold の主たる活動期であったヴィクトリア朝中葉のイギリスは未曾有の経済的繁栄を享受していたとすることができる。国内的には自由競争と対外的には自由

貿易とを標榜する「自由放任」(laissez-faire)の経済体制は、穀物法の廃止によって世紀前半に確立し、世界第一の工業生産力と相俟って、イギリスの国際競争場裡における圧倒的優位をもたらしていた。この繁栄と共に、土地貴族階級、商工業の中間階級および労働階級の三者間の関係も、世紀前半のような深刻な対立的様相を呈さず、政治的社会的に相対的な安定期が訪れていた。こうした繁栄と安定の上に、自然科学の発達が生産機構の革新と拡大を約束し、不断の「進歩」に対する信仰を醸成する中で、イギリス国民は、一般に「心地よい満ち足りた気分」¹⁸⁾に浸っていたのである。

自足と自信が瀰漫するこの社会全体の雰囲気、Arnold は逆に深い危機感を抱いた。人々は既成の生活態度と因習に安住し、それらを忠実に機械的に守って事足りりとしている。しかしその中で、「人間にとって唯一の、常に神聖であると共に万人の義務とすべき」¹⁹⁾目標である「完成」の理想は、却って見失われているのではないだろうか。Arnold はこの危機の徴候を、当時の産業主義と自由主義の内に見出すのである。

Arnold は、生産の拡大と収益の増加を原理とする「産業主義」(Industrialism)が招いた、物質主義的傾向の蔓延をまず糾弾した。「今日、十中九人までの英国人が、われわれの偉大と幸福は、われわれの富裕によって証明されると信じている。この信仰の固さに優るほどのものは、かつて存在したことがない」²⁰⁾と慨嘆する彼は、このような信条は、誤まれる「機械」信仰の産物であるとする。Arnold の言う「機械」(machinery)とは、人間固有の精神的諸価値の実現に奉仕すべき外的諸手段であり、もろもろの物質、制度、機構はすべてこれに含まれる。言うまでもなく富も「機械」の一部である。人間の幸福は、その「完成」への接近にあり、しかも「完成」とは「何かを所有することにあるよりも、むしろ何ものかに成ることにあり、ある外面的境遇ではなく、心と精神の内的な状態のうちにある」。²¹⁾この内的精神的完成こそが、人間存在の唯一の目的であり、「機械」は総体として、この究極目的の達成に専ら寄与すべきものである。してみれば、富への拝跪は、手段と目的の転倒に他ならない。

Arnold は、こうした転倒が産業主義体制全般の基本特徴であると見なす。そこでは、文明の指標が、質ではなく量に、精神の完成度ではなく物的条件の整備に置かれている。例えば、商工業の隆盛を導いた「いわゆる中間階級の人間は」、ロンドン市内の二つの地区の間で「手紙が一日に十二回も配送されたり、汽車が両区間を十五分ごとに往復したりすれば、それが最高度の発展であり文明であると考えている」。²²⁾このようにして、「手段」が「目的」と取り違えられる状況では、「機械」はその本来の効用を発揮するべくもないというのが、Arnold の見解である。秀れた文芸や美術を、高貴で偉大な人間性の表現と理解する Arnold は、自らの時代を文明の不毛期と断じ、そこに致命的な文化的欠陥の証しを見た。彼は、Shakespeare や Spenser らによって輝かしい精神文化の花が開いたイギリス・ルネッサンスを敬慕して言う。「仮にイギリスが明日海に吞まれてしまうと、これから百年の後、ここ二十年間のイギリスと、当今の石炭やそれに依拠する産業活動など殆んど未発達であったエリザベス朝期のイギリスでは、どちらが最も多く人類の愛と関心をよび起こすであろうか、どちらが偉大さの証拠を最も多く示すであろうか」²³⁾と。このような Arnold のレトリックの内に、われわれは消極的な尚古の姿勢ではなく、人間精神の物質からの解放に対する彼の渴望を読みとるべきであろう。

次に取り上げる Arnold の「自由主義」批判も、その根本に「機械」信仰の悪弊が潜んでいることを指摘している点、および批判の焦点となる社会勢力に中間階級を据えている点で、先の「産業主義」批判と本質的に軌を一にする。そして孰れの場合も、批判の拠って立つ基点として、

「人間の精神的完成」という「教養」の理念が一貫して掲げられていることに注意せねばならない。

改めて言うまでもなく、「自由主義」は19世紀の全般にわたって、イギリス社会を規定した支配的思想潮流であったが、その具体的発現形態と、それによって自らの利益を擁護せんとした勢力とについては、Arnold 自身による的確な概括がある。すなわち「自由主義」とは、「強大な中間階級」が挙って奉ずるもので、彼らは「政治的領域においては1832年の選挙法改正案と地方自治、社会的領域においては自由貿易と自由競争と産業による莫大な富の獲得、また宗教的領域においては国教反対派の反国教主義と新教派の新教主義を、その信念の基軸として持っている」²⁴⁾のである。

Arnold が憂うるのは、元来こうしたもろもろの社会的脈絡において唱えられた「自由主義」が、実は個人倫理のレベルにまで波及している点である。通俗の次元では、「自由」は専ら「自分の好きなようにすること」(doing as one likes)の意味に解されている。そこでは自由主義も良心の規制を外れた粗暴で無法な行動さえ正当化する、便利な建前に容易に転化し得る。Arnold は、そうした不安を孕む「自由主義」が、その唱導者である中間階級に止まらず他の階級へも伝播することを惧れたのであったが、彼のこの危惧は、1866年に起きたハイド・パークの騒擾によって増幅された。この事件は、参政権を要求する労働階級の二万人のデモ隊が、政府の禁止命令を無視し、警官隊の阻止にも拘らず鉄柵を押し倒して公園内で集会を強行したものであるが、Arnold はこれを、無知蒙昧な民衆による低俗な自由主義の暴発、すなわち「無秩序」の最たる例と見たのであった。

Arnold にあっては、「自由」とはそれ自体倫理的価値を内包する概念ではなく、したがって無条件に善を保証し得るものではない。自由はより高次の原理に従属しなければならない。「自由も機械でなくて何であろう」。彼は自由の本質を奉仕(service)におく。「唯一の完全な自由は……奉仕である。それは……われわれが最善の自己(best self)へと向上するための奉仕である。そして、われわれの普通の自己(ordinary self)が持つ、種々雑多な放縦で盲目的な諸衝動を、すべて最善の自己と完全な人間性の理念の下に調和せしめるための奉仕である²⁵⁾」。この人間の自己完成のための「機関」としての自由の自覚が欠ければ、自由主義は、現在のイギリスに見られる如く、低次の欲求充足のためのものと墮し、あげくには妄動の横行と同義となると Arnold は言うのである。

ところで、彼にとって自田主義の問題は、民主主義のそれと表裏一体をなすものであったように思われる。というのは、自由を金科玉条視し、あたかも行為の第一準則であるかのごとく見なす一般の傾向は、中間および労働階級という従来の被支配階層の社会的発言力の増大に伴うものであったからである。民主主義の運動は、彼の理解するところでは、過去「いわゆる優越せる階級によって」隷属と服従を強いられてきた民衆が、その規制から解放され、「自ら行動し、自分たちに関係する物事を自ら取り扱う」²⁶⁾権利を得て、能う限りその自己実現の機会と場を確保せんとする試みであった。つまり Arnold にあっては、民主主義は、民衆に独立した意志決定と自由な利益追求を保障する制度として捉えられていたのである。彼はこのような認識に基き、民主主義は確かに人間の本性に根ざす欲求の発動であり、その起点において正当なものであるとして、原則的にはこれに対して受容的な態度を示していた。だが同時に彼は、それが精神の自由放任に連なる危険を内在させていることを指摘する。「自分の好きなようにする」自由が等しく人間に与えられるとすれば、絶対的な価値体系が各人に内面化されていない限り、当然人々の思考

と行動の普遍的基準が不明となる。その危険性の端的な現われが、ハイド・パーク騒擾事件に代表される現今の社会的混乱ではないか、と彼は見る。²⁷⁾

Arnold の語る「無秩序」の本質は、そうした現実の混乱を惹き起こす人間の内的な無規範状態にあると言ってよい。問題の真の所在は、「完成」という至高の理想に向けて覚醒することのない、放埒な精神の弛緩と逸遊の内に認められる。あらゆる現実の悪は、啓発されず教導されない精神の外化であるから、このような内面の退嬰は必ず社会的困難を招来するのである。こうした内面の「無秩序」を助長する「自由主義」に抗し得る唯一のものが、Arnold にあっては、絶えざる自己批判の態度を保証するものとしての「教養」であった。蓋し「完成を追求する教養の熱望は、人々が好きなように語っているときでも、自らの語るに値しなければ、その中に善いものが、悪いものよりも善いものがより多く含まれていなければ、決して満たされることはない」²⁸⁾からである。

「教養」は、人間のすべての志向を「最善の自己」へ、すなわち内面的完成へと焦点づける。そしてこの作用を通じて、目的と手段とを本質的に峻別し得る判断力も培われる。かくして、自らの行為の倫理的妥当性を不断に問い直すことのできる、自覚的・自律的精神が陶冶され、いわゆる物質主義や低次の自由主義は自ずと拒否される筈なのである。

「教養」の示唆する人間的「完成」とは、最初にも触れたように、それを「所有して安んずる」のではなく、それに到るべく「生成発展する」²⁹⁾ 不断の自己創造のうちに見出されるべきものである。「完成は決して達成されることはない」³⁰⁾ と Arnold が語った意味は、それを目指した無限の向上的努力の積み重ねを奨めるところにある。諦観と安住を忌避する Arnold の理想主義は、人間完成の追求を放棄することを許さない。人間にとって永遠の課題たるこの「完成」のアイデアに照射されることによって、はじめて自己に対する、したがって社会や人間一般に対する批判的認識が成立するのであり、この認識を起点としてのみ、それらの絶えざる更新が可能となるからである。彼は言う。「すべての制度を作り上げてきた人間の思想は、絶対にして永遠なるものに依拠することで、必然的にそれら既存の諸制度を掘り崩していくのである」³¹⁾と。

IV

人間の内的精神的完成の理想を説きつつ、イギリス社会における産業主義と自由主義の及ぼす罪惡を弾劾した Arnold は、その批判的觀察を一步深め、これら悪しき「観念と習慣」を抜き難いものにして根源的要因を、ヴィクトリア人の特徴的心性の内に認めた。それは、中間階級を母胎として「時代の精神」とまでなった清教主義 (Puritanism) の反知性的な精神傾向であった。人々をして教養を軽視させ、ひいては彼らの人間的完成への接近を阻んでいる最大の障害が、この清教主義の持つ反知性主義であると Arnold は判断したのである。

彼は、人間の人格形成における「全体性」(totality) の理念に拠って、偏狭な清教主義を批判していく。ここで特に注目したいのは、この批判を通じて、Arnold の基本的人間観と彼が抱く理想的人間像とがより明確に打ち出されている点である。その意味では、清教主義批判は彼の教養論の根幹部とも言い得るであろう。

さて Arnold は、真の人間完成とは「全体的な完成」であると語り、これを内容的に敷衍して「人間性のすべての側面を発達させる調和的 (harmonious) 完成」³²⁾であると言う。この定式から、清教主義批判の前提となる彼の人性論が展開される。ここに謂う「人間性」とは、「獣性から区別され」、人間を人間たらしめる本質的諸属性の総称であるが、Arnold はこれを大きく二

つに分け、それぞれが人間の自発的衝動として発現すると考えた。一つは、対象をその真なるままに把握せんとする知的衝動であり、もう一つは、自己克服によって精神の安寧を得んとする道徳的衝動である。前者は、「結局は正しい実践の基礎となるべき諸々の観念を獲得せんとする英知、人間の発達に伴って変化する諸観念を絶えず新しく結合させることを求める熱烈な欲求、諸観念を完全に体得してこれらの調整を図らんとする抑え難い衝動」の総体である。一方後者は、「実践へと向かう精力、職務と克己と労働に関する至高な義務観念、われわれの持つ最良の光明を掲げて雄々しく進む真剣さ」³³⁾等々として表出する。Arnold は前者を、認識と思索の透徹を希求したギリシャ人の文明に因み、ギリシャ主義 (Hellenism) と名付け、後者に対しては、神への献身と善行への努力に良心の証しを見、それを人間存在の目的として厳格に規範化したユダヤ教ならびにキリスト教の精神に擬え、これにヘブライ主義 (Hebraism) の名を与えた。ギリシャ主義は自らの自由な意志に発動する「知識」への愛に基礎づけられ、対照的にヘブライ主義は、己れの原罪意識に発動する、神への絶対的帰依としての「信仰」に基礎づけられている。それ故ギリシャ主義は、知識をそれ自体目的として追究する傾向であるのに対し、ヘブライ主義は、己れの信仰と道徳性の明証を実践に見出さんとして邁進する傾向なのである。

このような二つの範疇によって人間性の二側面を把握した Arnold は、古代ギリシャ・ローマの文芸時代、中世キリスト教の時代、次いでルネサンスから更に宗教改革の時代へと至る人類史の各段階を、この二傾向の消長・交替の連鎖として理解しつつ、ギリシャ主義とヘブライ主義が完全に総合統一された世界を理想社会として描く。彼は、自らの生涯の関心が「イギリスの文明化——イギリス社会全体をヒューマニズすること、すなわち、それを調和のとれた真に人間的な生へ至らしめること」³⁴⁾にあると言明しているが、この「文明化」(civilization) とは、かの二つの人間的特性が、相互に排斥または侵蝕されることなく、調和し補足しあって、両者ともに最高度の発展に高められた状態を意味するのであろう。ところで Arnold における「文明化」とは即ち「社会における人間のヒューマナイゼーション」³⁵⁾に他ならず、総体としての社会のヒューマナイゼーションは、その構成員たる個々人のそれに帰一する。したがって、イギリス社会全体としてのギリシャ主義とヘブライ主義の総合統一は、その成員各自における知性と道徳性とを可能な限り陶冶し、それらのより高次の統合を実現していくことによってのみ達成され得るのである。このような人間の知性と道徳性との完全な統合こそが、まさに Arnold の言う「全体的な完成」の内実なのである。かくしてわれわれは、Arnold の思想的根底に、人間の全体的・調和的発達を志向し、人間の完全性を求めて止まぬヒューマニズムの精神を確認することができよう。

われわれは、Arnold のヒューマニスティックな人間理想が、彼を取りかこむヘブライ主義の制圧の真只中で生み出されたことに留意せねばならない。ヴィクトリア朝社会は、産業主義の旗印の下あくなき利益追求を進める半面で、敬虔な信仰に象徴される道徳主義を、その精神的基調として持っていた。ある歴史家は、この時代の「根本的なパラドックス」は、功利主義と福音主義という「理論的には相容れぬ二つの力」が、「部分的に接合し連合した」点にあるとする。³⁶⁾この福音主義の主流をなすものが、広汎に定着した³⁷⁾清教主義であったことは断るまでもない。

だが Arnold は、イギリス社会に根をはった清教主義の中に、ヘブライ主義的傾向の一面的発展とそれがもたらした弊害を見た。宗教的情操を道徳性の不可欠の要素として重視する彼も、聖書の世界観にのみ固執し、その一字一句に「あたかもそれが護符でもあるかのように」³⁸⁾拘泥する清教徒たちの機械的形式的な信仰には、強い疑問を抱かざるを得なかった。彼らは聖書を唯一の精神的規矩と仰ぎ、自らに内在するギリシャ主義的傾向を閉塞させてしまった。そして、「宗

教だけでなく、芸術、科学、詩、哲学、歴史」等々「あらゆる人間的経験の声」³⁹⁾から人間完成のあり方を謙虚に学ばんとする「教養」の努力を無用なものとして斥けたが故に、必然的に硬化した独善的道德主義に陥ったのだと Arnold は見る。しかも、そうした信仰姿勢が他宗派との激しい対立抗争によって助長され、清教主義は一層偏狭で閉鎖的・排他的な性格を持つに至ったのである。清教主義者たちの不完全性を表徴する傲岸と自己満足の態度を、Arnold は「地方人根性」(provinciality) と呼び、完成された人格における「全体性」と対比させた。知性を欠きながら道徳性だけをやみくもに追い求める彼らは、「人間性の一面のみを、他のすべての面を犠牲にして発展させた結果、不完全な、不具な人間となってしまった」⁴⁰⁾のである。

かくして知的な批判の精神を損った「ヘブライ主義」者たちは、自らの生活原理が「産業主義」であれ「自由主義」であれ、既得の観念と習慣を客観視し批判の対象とする術を知らず、逆にそれらを絶対化して、「柔軟性の欠如と慢性の倦怠」⁴¹⁾の中に日常活動に勤んでいる。イギリスの「ヘブライ主義」は、「最善の自己」を希求しながらも、その過度の一面的發展のため、却って「普通の自己」に止まり、むしろそれを礼讃する狭量な「俗物」(philistine) の支配を招いたのだと Arnold は言うのである。

だが、こうした批判を繰り広げながらも、Arnold の眼は中間階級の清教主義を、その心情の発生的根源に立ち返って肯定的に捉える公正な視点を失っていない。彼らの宗教的熱情はひたむきな善への意欲の現われであり、そこに傾注される甚大な精力は彼らの貴重な特性として評価されるべきであろう。『教養と無秩序』にみられる辛辣さはニュアンスを異にする、別の論稿での Arnold の発言を引いておきたい。「われわれの中間階級は、完成のための必須の基盤たる、あの人格的核心とあの道徳的力とを、既に自らの手で確保しているのだ」。⁴²⁾つまり Arnold は、中間階級の豊かなヘブライ主義的傾向が、「完成」のいま一つの要件たるギリシャ主義傾向によって媒介されることを切望しているのである。彼にすれば、聖書の断章から神の意志に正しく沿った行動指針を読みとるには、まずもって思慮に富んだ広闊な知性の援助が不可欠なのである。こうして、「明白な事理を熱烈に探究する」ギリシャ主義的「本能」を賦活し、固陋なヘブライ主義に新たな生命を吹き込み得るに至るまでその成長を促すべく、「教養」は要請されるのである。ヒューマンイズムの伝統に立つ Arnold にあっては、ギリシャ主義はヘブライ主義に対しそれを「変容し更生させる」⁴³⁾統制的・指導的機能をも有するものであった。したがって、清教主義者がその宿弊から脱却することは、彼らのギリシャ主義的傾向の成長を俟ってはじめて可能となるのである。このように考えるならば、Arnold の語る「全体的な完成」とは、それぞれ独立して均等に活発化した知性と道徳性との、単なる「併存」の謂ではない。それは、不断に陶冶される批判的知性の作用を受けて道徳性が正しく定位され、他方知性は道徳性の媒介を経て実践的な力を獲得するという、相互のダイナミックな有機的關係においてのみ成立するものであった。「全体的完成」が、必然的に「知」と「徳」との「調和的完成」でなければならなかった所以もここに了解されるであろう。「ギリシャ主義」を称揚してなされた Arnold の時代批判、ひいては彼の説く「教養」の理念は、こうしたヒューマンイズムの人間観に支えられていたのである。

V

本稿は、Arnold の教養論をその社会批判の文脈において検討してきた。したがって彼の教育に関する論議を直接に取り上げることはできなかったが、社会批判の中には既にそれに結びつく要素がいくつか見出される。最後に、この点に少し触れておきたい。これまで見てきたように、

彼の社会批評は19世紀イギリスの精神的「無秩序」の状況に対する厳しい告発であったが、その根底には現実改善の強い意向が貫かれており、この状況を克服する具体的方途をイギリス国民全体の知的「教養」化の中に求めんとするものであった。この「教養」化とは、Arnold 自身のことばを用いれば、「人々に、不完全な知識をもって誠実に行動するのではなく、行動のためのより堅実な知識の基礎を獲得するようにさせること」⁴⁴⁾であって、彼の社会批評は、本来優れて教育的な意図を内包していたとすることができる。そこに明瞭に示された現実改革的な志向が、彼の教育論をも等しく支配していることは十分に予想されるところである。すなわち、人間的「完成」の理想の下に全国民の精神的統合を図らんとした Arnold の社会批判の主意は、教育行政官としての彼の中等教育改革の構想にも、また彼の幾つかの教育評論においても一貫して反映されていると考えられる。というのも、「最良の」知識を各個人に体得させることを通して、イギリス国民を「教養」へと導くことこそ、Arnold における教育の主要課題であったからである。

しかも、このような教育の一般的課題と関連して、当面の教育対象となるべき社会階層として「中間階級」を指定した点に、彼の社会批評の実践的な意義が認められる。民主主義の巨大なエネルギーを、「教養」の理念に則って主導し得る潜在力を秘めた社会勢力は、結局 Arnold において商工業の中間階級以外にはなかった。国民的な教養化は、他のいかなる階層にも先んじて、まずこの中間階級の土壌で始められねばならなかったのである。

中間階級の教育は、Arnold にとって第一に「必要性」に基く問題であった。彼らは多くの欠陥を持ちながらも、既にイギリス社会の中核的部分に成長していた。Arnold の社会批判が専らこの階級に集中されたということ自体、もはや揺るぎようもない彼らの社会的・文化的影響力に対する正当な評価を物語っている。それ故、産業主義の超克は可能であるか、民主主義は真に擁護すべき社会体制たり得るか——こうした時代の根本問題への回答は、紛れもなくこれらの時流を担ってきた中間階級が、今後いかにして「行動の確実な基礎となる知識」を獲得するかにかかっていたのである。

だがここでわれわれは、中間階級への教育の必要性に対する Arnold の認識が、彼らの豊かな教育可能性への期待に裏付けられていたことを看過してはならない。彼の次のことばを聞くと、一方で中間階級の頑なで柔軟性を欠いた精神に仮借ない批判を浴びせていた Arnold が、他方同時に、道徳的資質に恵まれた彼らの「教養」化、すなわち「教養人」への転生にいかに大きな希望をかけていたか知ることができよう。「清教徒の中間階級は、その欠陥はあるにしろ、イギリス国民の最良の素材である。……その成功が、われわれの未来の最高の期待である」⁴⁵⁾。

こうした点に着目するならば、Arnold が「中間階級の教育こそ、最も正しく、確実で、誤りのない偉大な民主主義的改革の一つである」⁴⁶⁾と述べた真意も正しく理解されよう。そして Arnold の中等教育改革への積極的な姿勢も、彼が教育対象として中間階級を指定していたことと、決して無関係ではないことも、容易に推察されるところであろう。かつて自由放任主義の下で、単なる「夜警国家」たるべく活動を制約されてきた国家権力に対して、イギリスの「文明化」の「推進力」(agent)として、国民教育を初等教育レベルに止まらず、中等段階にまで拡大するイニシアティブを取ることを、極力 Arnold が力説した根拠も正にそこに見出されるべきではないだろうか。

本考察は、「教養」を基準とした Arnold の社会批判に焦点を絞った。したがって、ここで扱われたのは、彼の教育思想全体のいわば基底的・前提的部分とも言うべきものである。われわれに残された課題は、彼の教育論そのものの内容に立入って、いわゆる「教養」がいかにして広く

国民的に形成され得るのか、その基本条件として整備されるべき教育制度・教育内容に関する彼の発言を詳らかに検討することである。特に、「教養」を育む「最良の」知識の所在を探る上で、彼の教育内容論は極めて興味深い材料と言えよう。今後これらについての分析・解明を通じて、社会批判から教育改革構想へと至る Arnold の教育思想の全体的把握に努めたい。

註

- 1) W.H.G. Armytage: *Four Hundred Years of English Education*, 1964, p. 170.
- 2) 中央教育庁および教育審議会の設置、学区制の施行と地方教育当局による行政管理など、彼の建議の詳細と、それが及ぼした影響については、P. H. Butterfield: 'Aspects of the work of Matthew Arnold for Royal Commissions', *The British Journal of Educational Studies*, vol. XV, No. 3, 1967, p. 291. および白石晃一「マシュー・アーノルドの中産階級教育論」(『東京教育大学教育学部紀要』No. 20, 1974) 29~39頁参照。
- 3) R. L. Archer: *Secondary Education in the Nineteenth Century*, 1921, p. 185. W. A. C. Stewart: *Progressive and Radicals in English Education 1750~1970*, 1972, p. 133. Butterfield: op. cit., p. 291. など。
- 4) *Schools and Universities on the Continent* (The Complete Prose Works of Matthew Arnold, R. H. Super ed., vol. IV) p. 254.
- 5) パブリック・スクールを除けば、それらの主たるものは、自然科学や近代語重視の非国教徒アカデミー、古典教育に終始する老朽化したグラマー・スクール、および基礎的技能・知識を安価に教授する、数としては最多の営利目的の群小私営学校であった。
- 6) A French Eton (The Works of Matthew Arnold, De luxe Edition, 1903, vol. 12) pp. 66~70. 以下の Arnold の引用はすべてこの全集に拠る。
- 7) *ibid.*, p. 33.
- 8) 'middle class' の訳語である。19世紀のイギリス史においてこの語は、政治的・社会的に土地貴族と労働階級の中間の存在であった諸階層を総括する実態概念であり、特にその経済的利害を代表していた産業資本家層を指して用いられる場合が多い。したがって往々なされる「中産階級」という訳はやや不適切と思われる。「中間階級」の訳語は、河合秀和『現代イギリス政治史研究』(岩波書店, 1974) に倣った。
- 9) A French Eton (vol. 12), p. 80.
- 10) B. Pattison: 'Matthew Arnold', 'Pioneers of English Education', A. V. Judges ed., 1952, p. 199.
- 11) F. G. Walcott: *The Origins of Culture and Anarchy*, 1970, p. 45.
- 12) W. F. Connell: *The Educational Thought and Influence of Matthew Arnold*, 1950, pp. 161~9.
- 13) 14) *Culture and Anarchy* (vol. 6), p. xi.
- 15) Arnold はこの中で、「批評の任務とは……世界で知られ考えられている最良のものを知り、ついでこれを世に知らしめることによって、真の新鮮な思想の流れを作り出すことである」と述べている。この表明は先の「教養」の定式と完全に照応する。The Function of Criticism at the Present Time, *Essays in Criticism* (vol. 3), p. 20.
- 16) *ibid.*, p. 6.
- 17) *Literature and Dogma* (vol. 7), p. 385.
- 18) D. Thompson: *England in the 19th Century* (The Pelican History of England 8), 1972, p. 101.
- 19) *Culture and Anarchy* (vol. 6), p. xxxix. 20) *ibid.*, p. 17. 21) *ibid.*, p. 13.
- 22) *Friendship's Garland, Culture and Anarchy* (vol. 6), p. 378.
- 23) *Culture and Anarchy* (vol. 6), p. 16. 24) *ibid.*, pp. 31~2. 25) *ibid.*, p. 191.
- 26) *Numbers; or the Majority and the Remnant, Essays in Criticism* [second series] (vol. 4), p. 286.
- 27) Arnold の民主主義観の背景について触れておきたい。19世紀イギリスの社会通念では、もともと大衆による支配を意味する民主主義 (democracy) は、国王の支配 (monarchy) あるいは貴族支配 (aristocracy) と共に、大英帝国を構成する一つの相対的な要素にすぎなかった。もちろん民主主義の急速な進展と優位は Arnold の時代既に明らかであったが、決してそれはまだ今日のような普遍的原理としての

竹熊：Matthew Arnold における教養の理念

承認を得ていたのではない。河合秀和：前掲書，序章第三節参照。

- 28) Culture and Anarchy (vol. 6), p. 15. 29) *ibid.*, p. 11.
30) 31) Democracy, Mixed Essays (vol. 10), p. 45.
32) Culture and Anarchy (vol. 6), p. xiv. 33) *ibid.*, pp. 120~1.
34) Ecce, Convertimur ad Gentes, Irish Essays (vol. 11), p. 113.
35) Equality, Mixed Essays (vol. 10), p. 61.
36) Élie Halévy: England in 1815, 1924, p. 509.
37) 「非国教徒の良心がすべてを支配していた。貴族すらも、公の場ではこれに従った。」
R. Lewis & A. Maude: The English Middle Classes (Pelican Book), 1953, p. 39.
38) Culture and Anarchy (vol. 6), p. 151. 39) *ibid.*, p. 11. 40) *ibid.*, p. xv.
41) Equality, Mixed Essays (vol. 10), p. 76.
42) A French Eton (vol. 12), p. 68.
43) Culture and Anarchy (vol. 6), p. 160. 44) *ibid.*, pp. 218~9.
45) Irish Catholicism and British Liberalism, Mixed Essays (vol. 10), pp. 137~8.
46) Ecce, Convertimur ad Gentes, Irish Essays (vol. 11), p. 132.

(博士課程大学院生)